

## 秋雨：創作

著者	山下，雅實
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 2
ページ	5 3 - 8 9
発行年	1913-11-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6291">http://hdl.handle.net/2298/6291</a>

## 秋

## 雨

ま さ み

眞紅な毒毒しい強迫觀念の壓抑に、微細な、鋭い銀の針で刺される苦痛を感じてゐる。絶えず惴惴と戰慄する蒼白い神経は、只氣分を淋しく苛苛させるばかりである。浸み入る如き寂寥に心は喰はるゝので、わたしは眺めがちに此の頃の日を暮してゐる。

ゆくりなく深い泥濘に陥つた。抄らない思ひをして急つてゐる。<sup>あせ</sup>重い材木で道は遮られた。除けやうと甲斐もなく藻掻いてゐる。

——けれど決心さへしてしまへば、さほど考へ沈むにも及ばないことなのである。

室に歸つて來たら絹子が居る。絹子は机の側に坐つて、又例の裁縫<sup>しとせ</sup>を始めてゐる。わたしは遣る瀬なくいらだつ胸を抑へて茵に着き、激した頭腦に拳をあてがつて机に俯向く。眼を瞑つて昵と靜かにしてみても、後頭の邊が疲れ切つたやうに痛ましく疼く。

『どうかしたの、兄さん』

と、暫して絹子は云ふ。わたしは答へずに黙つて居る。

一人で居るといふことは、淋しいには違ひないけれど、それでも、際涯<sup>はてし</sup>ない寂寥の極限に逍遙ひつゝある時は、ほかの人と一緒に居て何か憚かるやうな思ひをするより、却つて淋しい一人になつて、廣漠たる寂寥

の底に行み、只自ら涌いて流れる涙を手の甲に受け、それでも見詰めたり嘗めてみたりする方が餘程懐しい。  
わたしには人を容れ得ぬ淋しさがある。

ふと思ひ付いたやうに唐突に、彼方へた行きと絹子に云ふ。絹子はびつくりしたやうな、それでも素直らしい表情をしたが、

『……でも此處に居つたからゆて、邪魔になることは些ともないわな。』  
憊う云つて、恩を仇で返された時のやうな口惜しさを隠しきらずにある。

ませた口をきく女である、さう思つてウールの机掛の隅を、わたしは矢鱈にいちづてみる。さうなりとしてゐるより外に、何もしては居られないしよ、いなさかわたしにある。

『兄さん、やつぱり居てはいけないの。た邪魔は些ともせんのに。』

『邪魔になるなどは云つてやしないよ、きんちゃん。……何でもいゝから彼方へ行つて呉れ。』

『そやけんぞ兄さん、あたし困るわな。今日中にこれをしてしもどかんと、明日先生にたこられるわな。』

『此處でしなくつてもいゝぢやないか。彼方でも出来る仕事ぢやないかい。早くた行き、早く。』

『さう急かすともいゝわ兄さん。あなた今日はどうかしてゐるわな……。どうせ今に行きまゐるわな。』

子供くさい妹まで、刺々しい氣障なことを平氣で云ふやうに思へて、わたしはぐさぐさしてしまふ。

『兄さんもちやんとわかつてる癖に……。彼方ぢや裁縫も何もしいられませんわな。義ちゃんも新ちやんと、それに小さいのまでが一緒になつて、わい／＼云うて悪戯ばかりするのねすから。』

『そんなら倉の二階にでも行つてみる。』

『倉の二階は暗うていかん。』

絹子は縫ひ／＼斯う云つて、次の待針まで針を寄せる。そこで裁縫しこぞの手を止めるのかと思つて居たのに、絹子は待針を抜いて針山に刺し、又その續きを縫うて行くので、わたしは自烈たくて堪らなくなる。

『わい、もう大概にしどかんかい。』

痛む頭腦を堪わがてに、譯もなく獨りで急り藻掻く心を凝視する。絹子は冬の空の霽れないやうな氣の濟まぬ顔を見せて立ち上り、針仕事の跡を形付けもせで、さつさと疊を鳴らして室を出る。十四といふ年にしては、丈たけの低いせい、か、まだ子供々々した後姿を、苦しい眼で睨と見送る。板敷の狭い廊下から、椽から、障子の陰へ隠れてしまふ。急に、小さな戦争にでも勝ち、凱歌を奏するやうな氣分にならうとする。けれども依然頭腦は疼く。あの事が、毒々しい青蛇の鎌首に似た頭を擡げて、い／＼させつゝ、佗しい雲で隙間もなく蔽うてしまふ。

ふと戸外そとで音がしたから眸を向ける。何の音だつたか分らない。午後の空は蒸すやうな鬱陶しさに澱んでゐる。わたしは仰のけになつて眼を閉ぢる。――秋に入る天候は割合に靜穩であつた。二百十日も二百二十日も、さしたる風の慘害を見ずに、無難なところを通つては來た。けれど長い間の早魃から、上氣でもしたやうな曇日になつたのは、つい二三日前からのことである。稻のことでも氣にしていたか、風にならねばいゝがと云つた嫂の言葉をふと思ひ出す。風だ、どろ／＼／＼う大暴雨になつて、田も畑も家も樹も蹂躪されてしまへばよいにとわたしは思ふ。それでも空は、ど／＼と曇つたまゝでゐる。どこか明るい日の照る野路でも一人で歩いてみたい。

寝てる間に夕暮近くなつてゐる。氣がつくと、頭腦もさほど痛まない。靜かに起きて立膝に坐る。縫物の横に、絹子の書いた清書らしい四折の紙が落ちてゐる。什麼字を書いてるかしらと、つい手を出して取つて見る氣になる。

千代女の朝顔の俳句である。同じ句を二行並べて書いた。文字はみんな拙劣である。殊に「水」の字の可怪しいのに、甲と朱書の評點は、過分なマークと云はうより、寧ろ先生に懽られてるんだと云ひたくなる。あらぬところにばかりまかせて居て、頭腦や手先に智惠のまはらぬ妹の書いたものと思つてしまへば、まあ此の位のものであると、折角起つた飽氣なさも直ぐにくづをれて消えてしまふ。縫ひさしの帶はぞんざいに置いてある。もう派手すぎてされないやうな友禪の晝夜帶である。只た稽古に縫ふのねすから、縫うてしもたら直ぐ解くのねすと絹子が云つた。わたしはその言葉を思ひ出して、折角縫うて置いて又解く程なら、はじめから、解かいでもよい位の柄のきれで仕立つればいゝにと思ふ。

針箱の中に、針の刺さつた針山のあるのが目につく、燃ゆるやうな絳絹の中から、針はいくつも頭を出してゐる。針の頭には、糸の通つたのもあれば通らないのもある。糸は黒や白や色もので一通りではない。わたしは何氣なく水色の絹糸を引つ張つてみたり、針の頭を指先で押してみたりしてゐると、ふと、何かの小説に、針山の針を物差で叩いてはあごけない面白さを味ふやうなことが出てゐたのを想ひ出して、成程この事だなど物差を取つてみる。針の身はびよい／＼と軽く叩かれる度に埋つてゆく。つい、やり過ぎて頭が絳絹に隠れてしまふ。糸でそれを引出して又叩く。鳥渡面白いやうであるから同じ事を何遍も繰返す。しま

ひには糸の通してないのがづぶとはいる。今度は尺を下に措いて、二本の指先を絳絹に當てる。腫物の膿を出すやうに壓へると針はすつと出る。針山のしんには、女の黒髪でも入れてあるのか、幽かな弾力をひそめてゐるやうな感觸がある。さう思ふと髪 of 句が聞ゆるやうである。あまり面白くなつたから机に坐る。外には依然灰黒い雲が空に凍りついて、窓の前の川を殊に強く壓しつけてゐる。雲の中には何かぞ隠されてゐるやうである。長い間雨が少しも降らないので、川は大量水量が減つてゐる。それでも時々ちやぶ／＼と音たてゝ、遠い處へ行くやうに悠くぬめつて行く。窓の前の、川に蔭さす楓の樹の枝に、何か小鳥が棲つてはゐるけれど、死んだやうにして些しの身動きもしない。此の秋も楓は綺麗に照るであらうなぞと思ふと、中學に居た頃のことか浮んできて、毎年紅葉の美しい時を見計らつては、遠方から來てゐる友を伴つて、他家のやうなうちに寄宿舎から歸つて來たことなどを考へ出さずには居られない。――小倉服を着た中學生が遊んでゐる。無邪氣な顔をしてゐる。茸狩に行くんだと云つて騒いでゐる。秋の日の照る松山の羊齒叢に、いゝ／＼と分け入つて行く。學生は奮んだ松茸を見出して、しめた、と心を躍らしてそれを採る。こちらを向いてその顔は淋しく笑つてゐる。顔はだん／＼に稚氣が抜けて青白くなつてくる。しまひにはわたしの今の顔に成り上る。あの頃は嬉しかつた、懐しいと、心臓が破れる程躍つてゐる。斯うしてとりどもない追憶の流れを溯ると。やつぱり今のことだつて、すつとの後になつて想ひ出したら、涙の出る程懐しい思出になるかもしれない、つい氣が狂はしくなつてしまふ。ふと、母屋の方から

『お部屋の方ねすに、お母さん』

と、絹子のらしい聲が輪を描いて來る。わたしは誰か此の室に來るのではないかと、何だか追ひ詰められる

やうな氣分になる。すると廣い處は急に狭くなり、自分の領分を侵食さるゝ氣苦しさを覺て、いら／＼と又あの事は身邊を襲うて来る。

迫るやうな幾つもの顔が、わたし一人をまじ／＼と見詰めて、消すことの出来ぬ浮彫のやうに、わたしの前に蠢いてゐる。わたしは此の室に歸つた來た前までは、暗い母屋の八疊の納戸に居たのである。父母と兄と嫂との前に、血の氣のないやうな體軀を据ゑて、いら／＼しつゝ又あの話を聞かされた。

（わたしは自分の暗い淋しい心に飽々してゐるから、あの人が居ないとしても彼家へゆくのは好かないのに況してあゝした涙の塊のやうなあの人が居る。——わたしに出来ることであつたら、わたしはどうかして此の寂しい心を開拓しやう、淺慕でもいいからして、げら／＼笑へる氣分に生きたいと思つてゐたのに、彼家へ行つてあの人と一緒にになり、じめ／＼した梅雨期の鈍い黝すんだ如き空氣の中に、晴々した若い氣分も出せず、壓付けらるゝやうな重苦しい燻つたい生活を、倦怠と陰鬱と嫌惡との悲哀に送つてゆかなければならぬだらうか。——無抵抗な忍従のライフ、型に嵌つた單調なライフ——それは何時頃からのことであつたか、寂しい一生を送るのも損だといふことに氣がついて、生來生れ出ては摘み捨てられた陽氣の芽に、出来るだけ培植<sup>つちか</sup>ひもし養ひもして、努めて出せるだけの愉快な氣分も出し、綺麗な、晴やかな、熱れた林檎のやうな、紅い充實した平和な生を送つてみたいと、その頃の寂しい自分に裏切して、人の出る場所にも努めて出るし、人のやる運動も努めて爲るやうに生ふしたてた。それでも生れ落つるから母の無いわたしは、本能的にする／＼と或る大きな力に引摺られ、譯もなく遣る瀕せき孤獨の寂寥に落込んで、眞心から笑ふことも

出来なくなつた。これもくよくよとした、青白い、涙の痕の絶わぬやうなあのひと、二つの心を並べて比べたら、雙方ともいぢらしく惨めに顫へるだらう。たとへ自分を裏切ることでも、自分の行かうと思ふ道へ行く手段なら、厭ひもせずにやることも出来やうが、出やうくど苦悶しては、なほ出るこの出来なくてゐる淋しさに、愁ひに火を點けるやうな亂暴をするより、死ねたら死んでしまつた方がましだ。——かう思ふ。弱いでもないのである。わたし、自身の腕によつて、わたしにとつて幸福と思はれるやうな思ふまゝの自由な生が送つてみたいのである。

『米二、考へものだせ是も。……どうせ前まへのやうな者が勉強したからゆて、外にいらゐんかすんくやつて行きよるけに、さあ、どうせ碌すつぽうな者にもなりつこは無やせ。』

慈う兄が云つた。

『米さん、お前さんもちやんと分つてゐるだろに、早くきめをつける譯にはいかんかない、それにお前さんでないと血統が續つながらないのぢやけねに。……あれにしたところで、學校も出て居る何もある、別に非難うつ所はないんだし。それに又お前さん、さう長く兄さんの世話ばかりにも、なつて居られはしないのぞい。それは卒業でるまぢや金も出さん云うてぢや無やけれど、やつぱりお前さん、修業をしてしもたなあ、自分で働いて、自分で食うてゆかんならんとなると、それは大抵苦しいぞな。』

母は慈う云つた。

すみさん——あの人——を好かんといふことを母は知つてゐる。別に非難うつ所はなしと云つたのは、わたしに主義を變へよといふことである。あの人が學校を出てゐるのが、わたしにとつて何であらう。あの人の



家に金があるといふことが、わたしにとつて何であらう。わたしはわたしの思ふままの、好きな道さへ歩けたらそれでよいのである。――父はそれでも、あまり口数はきかなかつた。けれど減多にきかない口の、たま／＼二言三言ある方が、餘程きびしく感ぜられる。決心の堅い、頑固な、そして底力のあるやうな恐みを持つてゐる。母が口を多くきくのは、あの人の家が母の縁家だから勢ひさうである。

今になつても誰さへ室に來ないのだから、又、わたしの話でも出たのであらうと、わたしはさつきの想像を打消してしまふ。

窓の下の川端の石垣道を、八つ九つの男の子が三人通るのが俯目に見ゆる。

――二七、十四。二八、十六。二九、十八。――對岸の方を向いて止つては慙う叫んで行く。聲は何かに木魅して、澱んだ夕ま暮れの空氣の中を返つて來る。わたしは何もしずに悄然と空を眺める。空もけ怠い容子を投出してわたしに向つてゐる。

何かして慙麼時を慰みたいと思ふ。むづかしい本は讀めないのである。讀んだつて、鑿で削りとられるやうに頭腦が疼いてくるので直に伏せてしまふ。そんな書物は、讀みさしの儘皆形づけてしまふ。で何かわかり易い小説か詩に、美妙な天地でも見出せたら、音樂的の直感により、幾分か興味も涌くだらうと、小さな詩集を手につつてはみたものゝ、面白くなって机に抛り出してしまふ。やつぱり佗じく遺瀨なくいら／＼してゐる。

雨でも心ゆくばかり降つてくれて、紺青に秋の空が霽れ上つたら、晴々とした氣分がわたしにも滲み込ん

で来るであらう。それまで待つのも随分辛いのであるけれど、待より外に仕方はないのである。さう思つて又眼をつぶつてみる。——正氣を失つたやうな所から歸つて来る。周圍を見ると、もう宵闇はいつの間にか、老者の落入る時のやうに靜かに、闊い翼を張つて舞ひ降りてゐる。川の水音は黄昏の底に獻歎き、川向ひの人家からは灯の影が洩れて、遠いやうな近いやうな輝きを見せてゐる。

朝遅く眼が醒めると矢張戶外は昨日のやうに薄黒い雲で蔽はれてゐる。時計が止つてゐては何時だか分らない。寢腫らした臉をうちの者に見られるのも厭だから、下の川に降りて顔を洗つて来る、冷たい秋の水が肌膚を軽く刺戟する。窓の前の楓の樹には依然小鳥が棲つてゐる。

わたしは朝食をするために廊下から椽づたひ臺所へ廻る。臺所に這入ると、戸棚の陰の薄暗いところに、自分のた臍が淋しく据ゑてあるので、見たばかりで堪らなくさびしくなる。わたしはその淋しいた臍に坐つて、獨りでさびしく朝飯を喫ふ。うちの者は納戸で何かしてゐるらしい。七つ頭<sup>ななかしら</sup>に三人の甥は、遊びにでも出てゐるのか、音もことも無い。嫂が出て來て、厨の竈<sup>くわ</sup>の銅壺から茶を汲んで呉れる。嫂は襟を掛けて、何か小忙がしさうな容子をしてゐる。

『米さん顔色が悪いわな。』

と云つて見まもる。わたしはいゝ加減な返事をして箸を措く。短い廊下で二分された狭い内庭に、さびしく紫蘭の花が咲てゐる。何となく自分の身につまされるやうである。わたしはその花を眺め乍ら室に歸つて来る。

茫然してゐる。何もしないで、わたしの時は匍うて行く。時折立つても居てもをられないやうな切なさが襲ふけれど、それも抑制の下に泣寝入な淋しさになつてしまふ。只ながめがち遠いところを逍遙うてある。——うちに居て面白くない、つ／＼としてゐるよりは、町の乳母の所へでも行つた方がましだと、ついうちが出たくなる。うちの者に目付からないやうにそつと沓脱に降り、厨の冷たい土間を通つて戸外に出る。門から出ずにわざと構塀の潜りを開ける。小路に出るとやつと暗い處を脱れたやうな氣がする。體驅がけ怠いから餘り行きたくないけれど、行くは行かぬに勝るといつたやうな調子で、あぶなかく歩き出す。不圖氣がつくと、嫂が着物の裾を端折つて、素跣足のまゝ、姉様冠りをいぢり／＼小路を這入つてくるので、わたしは何か悪い事でもしてゐる所を見つけられたやうにはつとずる。

『米さん、何處へ行くの。』

斯う嫂が尋ねるので、行先を告へると、

『あんまり遠い處には行きなさんがいけんぞなわ。顔色があんまりよくないぞな。』

『ね、でも大丈夫ですよ。それに今日はもう歸りませんから。』

嫂は氣のりのせぬやうな顔をして、

『なるだけ早く歸つて下され』

『いつ歸るかわかりませんよ嫂さん。どうせ四五日は戻りますまい』

と云ひ捨て、往還へ歩く。わたしは往還に出て振顧つた時は、怜度嫂が潜りを入らうとするとこゝろだつた。



に、これからあの小母さんを母さん／＼云つて、も一つ時したら小母さんどこへ行かねばならんのぞい。』  
時折乳母に斯う聞かされて悲しくなるけれど、さう云つた乳母の顔が直に微笑むので、うそだ／＼と幼な心に打消しては、矢つ張此家の子だといふ日が續くのである。平和に單調に過ぎて行く幼年の日を、内でも外でもさちさんと遊び暮らしてゐる。さちさんは二つの姉である。よくその遊びのシーンとなる丘の上の小春様が、いろ／＼の神秘的な物語を乳母の口を通して與へてゐる。わたしの心は極めて平和で自由である。小鳥の様に朗らかに歌ひ乍ら、冷飯草履を穿いて、て／＼と小春様から町へ降りて来る。うちではちやんと小さな膳が据ゑてあるから、さちさんと向ひ合つて大人しく食事する。食事が済めば又二人の遊びである。それでも偶には怖いことがないでもない。

『さあ米ちやん、お前さんのほんどのうちから迎が来たぞい。』

どうかした折などよく唐突に斯う云はれた。小父―乳母の夫―は眞面目な顔をして嚇すのである。話にきいた人買にでも攫はれるやうに恐しさに、小さい胸を、ぎ／＼させて、板の間まの大きな米櫃の陰に、息もせず屈み込み、外の方を氣にしてそつと覗くけれど、誰も未だ恐しい者は來ないので、今来るか今来るかとほら／＼して潜んでゐる。そんな時には屹度乳母がどこからか飛んで來て、

『そんな事をしてもらつては困るわな、お前さん。可哀さうに子供心に一人で心配してをるぞな。』

憊う云つて乳母は米櫃の上から覗き込み、

『わゝ、可哀ぞ、可哀ぞ、……さあ米ちやん、もう心配することはないのぞい。母さんが、ちやんとついてるけねに、だあれもつれに來はあせん。母さんの大事な大事な子ちやけになあ。』

わたしを乳母は抱き締めて呉れるから、急に危険から脱れた心の緊張の弛みで、ぐつと胸にせきあげて怨めしく涙ぐむだ。小父は哄と大きな笑をして、

『よい子ぢやけねにだ、あれにも遣りはせん。』

と、今迄のことは反對になつて同情した。こんな事があるやうになつて、少しびく／＼し初めた。此度こそは眞實だ、此度こそはと恐れてゐた。何時も乳母は小父にぶ／＼怒つた。小父は只嬌々笑ふばかりであつた。

しかし程もなく其の日はい／＼來た。

春の日のどん／＼した午後である。わたしは派手な紺飛白の袷に濃い紫紺の帶をしめて、乳母と一緒に村の道を歩いて行く。道を挟んで兩側の畑には、もう麥の穂が出かゝつてゐる。強い刺戟に富んだ黄色な菜菔が、青い麥の間に／＼つきり浮んでみえる。わたしはど／＼乳母の前後に蹤いて行き乍ら、時々は鳥渡話も交へるのだけれど、乳母の顔には押し隠されてどもあるやうな悲しみが仄見えて、いつにない色の青黒い沈んだ面を、遠い處へ背けがちに歩いてゐる。びんびの花で束を作つて呉れたのを持つて、乳母の云つた面白い所とは什麼所であらうかと、白く續いた長い道の果を見乍ら歩いてゐる。聽てわたしは歩くにもきつくなつてきて、遂／＼乳母の背中に負はれてしまふ。やつぱり遠いやうな氣で白い道の末を眺めて行く。二人は同じやうな村里を二つも三つも過ぎる。白い道を孕んだ里からは又それが續くのである。

小さな流れの土橋を渡ると又人里に入る。里の廓の往還に沿うて建つた門構の古びた家の前で、乳母は屈むやうにしてわたしに草履を並べて呉れる。わたしは乳母の背から下りて二人で門を這入つて行つた。

家にはあの小母さんがゐた。小母さんは嫣然して『よく歸つたなあ』と云ふ。わたしは見知らぬ家の或一間で、繪本や寫眞などをしばらく見てゐる。小母は絶えず側に居て面白げに説明して呉れる。不圖氣がついて、乳母はごうしてゐるのかしらと、上り口の間に飛んで行けば、影も形も見ないので、急に心細く悲しく泣きさうになる。

『母さん、母さんいっしょ。』

と呼んで家中を捜し廻る。

『母さんはな、鳥渡用があるゆて出よつたけにな、もう直ぐ歸つてた出るぞな。さあ米ちゃん。この母さんと二人で遊んで待つてゐやうに。』

小母さんはわたしを元の室に連れ歸る。けれどもわたしは落着いて繪や話に身を入れるわけにはゆかない不安に迫られてゐる。小母さんがわたしの母だと云つたこと、母さん——乳母——が以前は私の子でないと云つたこと、此の二つは可成り濃い疑懼を興へるのである。わたしは時々襖の隙から上り口の間を覗いてみた。乳母はいつまでも歸つて來ない。

遂う——歸つて來なかつた。わたしは悲しくなつてし——と泣き出した。小母さんはわたしを慰めあぐんで、これも泣きさうな顔付になつてゐる。見知らぬ處に残された心細さ、父、母、姉から離された淋しさ、さういふものゝため立つても居ても居られなくなつて、聲を限りに泣き叫んだ。

けれども其夕、恐い小父さんに怒られて、暗い土藏に閉ぢ込められた。その怖さからもう泣けなくなつた。——小父さんはそのうち父となり、小母さんはまた母となつた。母さんは乳母となつてしまつた。それでも

わたしは、寢覺めの際などには、住みなれた町の家のあの部屋に寢てゐるとばかり思ひ乍ら、ふと正氣づいてみれば違つてゐるので、乳母のことやさち姉さんの事を思ひ出して、悲しく流るゝ涙の頬を敷布に摺り付けてみた。

乳母の面竄れた姿を見せるのは、それから餘程後の日のことである。乳母の氣脱のしたやうなあの眸は、どこからか不圖顯はれて來た。わたしは深い淵に取落した綺麗な玉の、再び我手に返る心の聳動に

### 『母さん。』

と力にまかせてしがみ付く。わたしは別れた日の事を思ひ出して黙つて涙ぐむ。乳母も霎時は無言である。乳母の涙を隠す辛い思ひが面に現はれてゐる。——乳母と母との間には、泌々した會話が取交はされる。わたしはそれを乳母の膝の上で聞く。

（女は眠ることもできない位に子のことを考へてゐる。女には素と子が二人しかない。しかしその内の一人は實の子ではないから、何時か離さねばならぬ日が來ることを恐れてゐる。その内さうした日が愈々來て、辛い思ひをして子を實家に返す。女は身の周りの淋しさと、子煩惱とに心を痛めてゐる。その思ひは嵩じて病となり、何ともつかぬ病床に臥することゝなる。床の中でも絶えず子のことを考へてゐる。病も漸く回復すると、頻りに子に行つてみたくなる。女は斷念めることができないのである。それでも子が實家に慣れ付いてしまふまでは、什麼事があつても行つてはならぬと、女は固く夫から警められてゐる。併し女にはもう其麼命令の權威を越えてしまふ煩惱の強さがある。そこで女は夫に斷り無く子の家に行く。女は行く途も絶えず心を離れ得ぬ子を思つてゐる。——子は丁度格子窓の間で繪本を見てゐる。女は子供



に知らないやうにして、格子の隙から内をかいまみる。子は思つたよりも達者で遊んでゐる。餘り餘念なく本を見てゐるので、女はそつと子の名を呼んでみる。けれども子の方ではそれに氣が付かない。女はやつと安心したけれど、自分の玉を横取られた悲哀に、苦しく心を曇らせてゐる。女は子供を抱き締めて、頬に吻けたい情に驅られてをれど、後に續くべき兩個の間の悲劇と苦痛とを恐れてゐるから、流石に手を出し兼ねてゐる。只闕窺から得る當座の安心を、淋しく抱いて、家に歸つて来る。聽て又不安と懷慕とに溢れて、女は堪へ難く悶てゐる。漸く夫の許をも受けることが出來て、女はまた勇々と子の家に行く。子は前見た時と變らないでゐるから、女はまた當座の安心を得ることが出来る。)

乳母と母とは咽んで話した。

わたしはいつしかうちの者になつてしまつた。けれども大きな大きな手術の後の、鋭いメスに對する痕の悶々を消し去り難くして幼年期から少年期に入る。――

母と思ふやうになつた小母さんが、實母でなくてその妹だといふことは、餘程長い間の苦悶と疑惑とが、つい五六年前になつて下した斷案である。

わたしの實母は一枚の寫眞である。わたしは寫眞から生れたのである。わたしには人間の母がないのである。母のない子は孤獨である。

わたしは、たつた一葉の寫眞を通して、曾つて實在したといふ母を想像するには、あまりに神秘と崇高とに驚かされてゐる。神秘と崇高との沙漠を置いて、母と子とは頗る距つてゐるのである。そこでわたしは淋しくてならない。

一開張の箱の中のあの若々しいわたし、の母は、わたしに「お母さん」と呼べと求めてゐる。わたしは心からさう叫べないのである。今生きて居つたら、その人を、わたしは「お母さん」と呼ぶことが出来るだらうか。果して他人でないことが表はせるだらうか。さう訝らないわけにはゆかないのである。

只、わたしの母は一枚の寫眞である。母は昔話のやうな物語のみに生きてゐる人である。

慙うしてわたしは淋しくなつた。自分で愉快にしようと努めても、母の無い事がさうさせなんだ。わたしは生の出發點から、既に寂寥に生くべき義務を負はされてゐる。わたしは申のない不具者であるから。――

わたしは、壓し付けられるやうな曇日に、坦々たる田舎道を歩いてゐる。懊惱と憂鬱とに仄黯く閉された心は、只行くより外はないから行くと叫んでゐる。隙間もなく暗い幕に覆はれた空の神経は重苦しい吐息に疲れきつて居るやうである。

あの事を矢張考へない譯には行かない。

あの人の胸に描かれてゐるわたしといふものゝ姿は什麼であらう。わたしは惨めな人間である。あの人の前でするやうな、彼歴快活な話に見出さるゝあの情緒、あれは甚しき虚飾である。絶えず冷酷な空氣の表に觸れてゐるわたしの神経は、じめじめした陰氣な纖弱な性質の人に向ひさへすればすぐに強い反作用が力を逞うして、もはや何等の共鳴を寂寥に起さないものである。その人と同化することは全然出来ないのみか、却つて或る強い反動と裏切とが頭を擡げて来る。そこで度し難い淋しさを自身に持つて居り乍ら、よく面白

い可笑しい糧を口にすることがあるのである。それは却つて内面の悲愴であり窮愁である。美しい西洋化粧をした舊日本式の劇場である。虚飾されたる美麗であり強味である。——わたしにとつてあの人がつまらないと同様に、あの人にとつてわたしは亦つまらないものだ。

溝に沿うて路傍の草の間から、營養不良の少女のやうに、瘦せた野菊の花が覗き出てゐる。わたしはけ怠い手を落すやうにして、花の一つを摘まみ取る。花には育ちゆく秋様あきさまが潜んでゐる。赤いけれど冷たい夕暮の太陽が、藏の白壁を明るく照らす晩秋の頃を、今年は何麼心を抱いて暮すのかと思ふと、ときめきいらだつ胸が抑へ難くなる。

——呪ふべき敗殘にとりつかれなかつたら、今頃は遠い彼方の空で、充實した強味ある高等學校生活をして居らうものを、これはまた考へも及ばない悲境に沈淪して、身に纏ひ胸に逼る哀情と不平とにいら／＼して暮さうとは。——

つまらない事だけぞ斯う思ふ。

昨年さきとしの春には中學を出た。受験の準備に上京もした。けれども、喜びを得ることは遂に出来なかつた。月日は慌だしく過ぎて行くばかりである。それでも前途なほ光明を認むるが故に、傷つけられたるプラウドを慰めて勉強した。しかしうちでは評議が變つたらしくて、地方の學校に入ると父が云つて寄越すのであるから、新緑の悲哀を包んだ五月の頃、都の空から飛ぶやうにして歸つて來た。丁度願書を出した日の其の晩に、遽に寒苦しく床についた其の時より、腸望扶斯といふ厭なものがわたしの全二月の支配主となつた。——蒲團を四枚重ねても五枚重ねても、氷の溶けて泌み入るやうな身内の凄じさ、麻痺藥の後の如きだやましき頭

腦の疼痛、さうした病に苦しみ乍ら、とんでもない處に迷ひ込んだ恐しい心が顫ふ。氣味の悪い担架の上に力無き眼を見開いて、死に行くやうな自分を見詰めつゝ、歸れないかも知れぬ果無きの不安に襲はるゝ。死人の家のやうにひそまり返つた病院の静かな夜、力無い目をふと醒ましてみると、茫とした薄黄色い電燈の下に、乳母が不安な顔をして看護してゐる。……………無感覺な遠い所からやつと歸つて來ると、やつぱりわたしは息苦しくベツトの上に寝てゐるので、生きて居るのではあつたかと、痛む皆を忍びつゝ周圍を見廻してゐる。灰燼のやうになつて、動けば壊れさうなわたしの體に、なほ腸出血期といふ恐怖が続くのである。「生」といふものにしがみつゝわたしは、窮屈な寂しい白布の上に鎮つてゐる。青白く弱みに弱つた過敏な神經に、まだ餘程長く「死」の不安はきらめくのである。慙うして今年の入學試験も逝つてしまつた。うちでは愈々わたしの行く道を變へやうとし始めた。

稻の穂には、どこからか吹く軽い風のそよぎが見えるのだが、なべての物は低い鉛色の空の下に、知覺を失くしたやうに靜かに落着いて、壓抑に對する彈力を潜めてゐる。遠い山、近い山、廣漠たる田、畑、森、里、家、樹、並木、草、溝、道、轍、足跡——雲を排し日を照らし、秋に相應しい氣分を出してみたいといふ、大自然の悲哀と努力とが隠されてゐる。

どうかしてあの事を切り抜けてしまいたい。今の内、わたしの體に價の小さく定つてしまふのは、眞箇につまらないことである。わたしは未だ附せられざる價値のものでなくてはならない。あの人と一緒にいるといふことは、外のこととは別として考へても、兎に角、少くともわたしに或る價値の定まることを意味してゐるやうである。わたしは未成品である。従て甚だ高く評價せらるゝことも出來ないではない。それに、さう容易

く自分を見限つてしまふ譯にはゆかないのである。わたしは、今こそ弱く又疲れてはゐるけれど、未だ自分の身には大きな未練がある。わたしは周囲の羈絆を脱出して、貴い高熱した生の道を辿らねばならない。赤い血の流るゝ時が屹度ある。高調な曲節の響く處が屹度ある。其の時と處とに生くべきである。さう思ふが故に、わたしは自分の蒼ざめた今の靈が厭なのである。わたしはわたしの健全の肉によつて、靈を虐ぐる必要がありはしまいか。わたしはやつと二十歳を越したばかりである。

打水に濕つた町の軒づたい來るのはわたしである。わたしは格子作の古めかしい町家風の家につと這入る。上り口ではさちさんが客に取合つてゐる。さちさんはわたしを見て嫣然する。わたしは黙つて會釋しつゝ土間を奥へ通る。客は四十恰好の女であるが、質の入れ受けて來た人とは思へない風采である。臺所から上つて居間に入ると、長火鉢の側に乳母が佇然として居る。何か考へてゐたものらしい。乳母はわたしを見遣りつゝ煙管を取つて、

『お前さん又どうかありはせんかない、米さん。』

煙管を外した口からは、白い烟がいくつも輪を描いてゐる。

『な、米さん、成るべく用心せんと不可わな。體を悪くしたらごもならんけに。』

『頭腦が痛うて困るだも。顔色が大分よくないでしよ母さん。』

乳母は茶戸棚の抽だしから何か紙の箱を取出して、

『これでも服んでみたら……お前さんの腦の悪いにも困るぞな眞箇に。あんまりつとめては勉強もせんがよ

い。折角辛抱して介抱し上げた甲斐がなうても困るわな。』

わたしは何といふ薬か知らないけれど、その丸薬を服んでみる。薬の香気が高く漂ふ。

『眞箇にどうかあるのではないかない。二階へでも上つていつとき寝んだらよからうに。つとめて起きてるのは反つて悪いんだし、な。』

わたしは、其處に色付が悪いかしらと思つて、鏡臺の前へ行つてみる。影は大分蒼白く見ゆる。眉の所がぴり／＼動くのも鏡に映る。わたしは實際に斯う青いのかと思つて、掌を寫して比べてみると、矢張鏡は眞實に近い色を示してゐる。そこでわたしは松やに二階に床をとらせ、怠い體を仰のけに寝る。後頭が可成痛んでゐる。

不圖うちの事が胸に浮んでくる。

『よく／＼考へて見ましたけれど、わたしは未ださう早く身の振方をつけいでもい／＼と思ふんですがね。それに又、一体養子に行くといふことなんぞ、實際好ましからんことですから。』

昨日はきつぱりこれ丈けのことを四人の前で云つた。『それだから困る』といふやうな、父母や兄の顔が浮んでくる。もう三度かあの話は前に出たのだが、その都度わたしは同じやうに斷つてみた。

『まあさう得心がいかなかない。も一度篤と考へてみる。善いことはさう／＼幾らもありやせんぞい。』手に餘したやうに父も兄も云つた。――

『米さんはどこに行つてぶはしございますか。』とさちさんの乳母に訊くのが聞えて来る。

不圖眼を醒ますと、薄暗がりの枕許には、さちさんが來て坐つてゐる。彼女はわたしの顔を覗き込むやうにして、

『やつぱりこゝが痛みよるの、米さん。』

筋はる如くに聞くのである。わたしはさほど疼かなくなつた頭を擡げて、

『いゝや、もうすつかりいゝんだよ、姉さん。』

『さう、そんなら些とはいゝけれど、四時間も五時間も寝むで居るんだし、それに大方未だに晝食もしてやすまい思うて、やつぱりごうかあるのではないかしらん思うてな、二三遍は上つて來て見たけれど、それでも起したなら反つて惡かろ母さんが云ふものだから、起すこともようせなんだわな。』

何時位になるでせうと聞くと、

『はあ、もう六時も過ぎてやうわな。』

さう云つてさちさんは戶外を見る。今朝も遅くまで寝てゐたのだから、今日は遂う／＼纏まらない一日になつてしまつたと思ひつゝ、黄昏れる戶外に眸を向ける。

『姉さん、何だか此の頃は、わたし憊う茫となつてしまふことがあるんですが、矢つ張姉さんにも其麼ことがあつて。』

『あるわな、米さん、やつぱり天気のせいだわな。けれど、今日はさう昨日の様に蒸せなんだぢやろ。』と云つて

『あなた、まだ下に降りなくつて。』と東京辯を眞似て笑ふ。わたしは漸う床を離れて、薄くらがりの梯子

段を下りる。蒲團は、ちんさんが疊んで下りて来る。居間では輝やかな洋燈の下に、乳母は新聞を讀んでゐる。わたしも側に坐つて讀んでゐる。

『まあ、米さん、米さん、鳥渡早う來た見いよう。』

慌だしくさちんさんが臺所から叫ぶので、行つてみると、小さな芥箱を指してこれだ、んと言つて箱の蓋を押へてゐる、松やと二人で盛に喜ぶ。何の事だか分らないけれど、薄暗い灯影を透して箱を見てゐると、中でぐどぐど音がする。一体何が這入つてゐんだと松やに訊く。松やは嬉しうて堪らないやうな素振をして、

『猫でやんす。若旦那さあ。あんまりちよいと盗みしに來やがるけねにな、何麼かして捕へて困らさう考へるけんぞ、直に逃げつちまふでなあ、今朝ほご思ひついて斯うして待つてると、やつぱりそこは畜生でな

あ、人間の智慧にや及ばんけねに、そうれ見なされ、遂う捕まつてしもたハッハッハ……』

箱を揺ぶつて喜んでゐる。何麼方法を案じつたのかと訊いてみると、水棚の窓障子に穴を穿けて置く。それから芥箱の蓋の一方に石を載つけ、一方に綱をつけてそれを穴から障子の内側に通して、綱を引つ張つて蓋を可なりに開けて待つてゐる。そこへ何時ものやうに盜棒猫がやつて來て箱へ這入る。得たりと綱を弛めると、石が重りになつて猫は出る事が出来なくなる。

『上面ならわしが一番でやんす。』

松やは獨りで喜ぶ。わたしはさう可笑くも何もないけれど、松やの笑ひに釣込まれてつい笑ふ。

晝から戸外に出歩いた主の小父さんが番頭と歸つて来る。明るい灯の下に飯臺ちやだいが据わる。小父は常時は沈黙家であるけれど、晩酌をやると少し愉快になる。松やは猫のことばかり繰返してゐる。



戶外では小雨が降つてゐる。庭の小さな築山に向つて座敷の椽に腰掛け乍ら秋雨を眺める。細い雨の脚で出来た白縞の中に、ほんのり浮いて見ゆる花がある。大分咲き零れかゝつてゐる。それでも淡紅の花びらには、觀賞の眼が自づと向く。薄ら冷たい風が來て、木の葉が一時に身顫ひすると、花は一片づゝほろ／＼散つて、ふわりと溜水に泛び漂ふ。家を離れた若き乙女が、漂泊の旅を續けやうといふのである。艶な花片、葵、葵。怎麼ことを思つてわたしは眺める。いつの間にかさちさんが後に坐つてゐる。

『大分綺麗な花だつたけれど、恙うして凋んでしまふといけなくなるわな。……それでも散ると云へば何だか可憐いやうに思はれてな。』

矢張花を眺めてゐたのらしい。さちさんは何時の間にか髪をぐる／＼巻に束ねて、寒いからといつて袷を着てゐる。

『雨でも降らなかつたら明日あたりは、何處にか出掛けるといゝんだけねごなあ』

『だげご姉さん、この鹽梅では、餘つ程長く續きさうだね、雨は。それに今年は未だ些とも降らなかつたんだから。』

『うん、そやけんご今頃の天気はあてにならんからの。重箱日和とか言ふんどの。ほうら米さん、あたしもあいたも尋常に行てゐる時分ちやつたわな、今日は雨が降るとか降らんとかいうて、二人で當つこしては何時も姉さんが勝ちよつたけになあ。』

曇つた一日、わたしは雨が降らないといふ。未だ二人共子供の時のことである。自分の村に小學のない頃であるから、乳母の家に宿つて通つてゐる。さちさんは雨が降るから傘を持つて行かうと言ふ。そこで銘々

の思ふまゝにして登校する。その内雨が降つて來て、放課時間になつても止まないから、二人で一つ傘を差して歸つてくる。道具を雨に濡らすまいとするから、勢ひ片一方の袖がびつしよりなる。さちさんは風呂敷を腰に結けて、丈が高いから傘を差しかけて呉れる。

松やが椽づたひに茹栗ゆでぐりを持つて來る。殻を入れるのだと云つて井を添へて置く。松やは例の面白さうな目付をして、眼だけでも何か滑稽を語つてゐる。わたしはさちさんの汲ひれて呉れた茶を啜る。

『やつぱり町では何でも早く出るんだね、姉さん。わたしとこなぞ斯麼ものは未だあるまいよ。』

『やつぱりなあ』

言ひく栗の皮を剥いてゐる。わたしは立派な町の娘になつたさちさんの横顔に見惚れてゐる間に、「什麼か此疲れた心を托するものが欲しい、けれどもそれは乳同胞のこの人でもない」と思つて、急に淋しさが育つて來る。

『米さん、あんたは何せ食べんの』

はつと我に歸つて栗を剥く。

『さあちちゃん前はもうやりよるかい。あれをしとかんと晝の間に合はんかもしれんぞな。』

乳母は前垂を下ろしく這入つてくる。さちさんの出て行つてから暫くして、此の家の養子に定つてゐる高商の大宮さんの話などが出た。

自分の末は一体什麼なるだらう。時にはさう考へずには居られない。今の内に小さく纏めてしまつて、酒

屋の主人で暮らすのは物足りないやうである。金に主づいて何になる。毎日々々長火鉢に坐つて、淋しく戸外でも眺め暮すより外はない生活が、ここに生の享樂を示してゐるだらうか。さうは云ふものゝ、どう藻掻いてみても、何だかさうした事になりさうである。餘計な事を思つて居るのだと自分では氣がついても、生來大きな打撃に痛められた心には杞憂を絶ち得ない。

雨はこの二三日降り續きである。思ひ出しては泣く兒のやうに、強く降る時もあれば緩い時もある。わたしは乳母には未だあの事を話してゐない。「そんな所があるんなら、行つた方がよいぞい」など、言はれては甚だ困るからである。

二階の窓の闕にかけて、欄干に凭れつゝ町を瞰下してゐる、今日は土曜でぐもあるのだらうか、未だ十二時過ぎたばかりなのに、澤山の學生が往き來する。四辻の角で三人の女學生が立話してゐる。近眼にはよくは分らないけれどその中の後姿ばかりしか見ないのは絹子らしい。さう思つてみると、その生徒は二人に別れて此方に歩いて來る。傘の下ではもう絹子の顔が笑つてゐる、それでは矢つ張違はなかつた。

絹子はわたしを仰ぎ見乍ら家に入る。わたしは矢つ張闕に腰かけたまゝである。霎時すると合羽のまゝの絹子が上つて來る

『兄さん一人で淋しいでせうに』

言はれた程淋しくはないのに始めて氣がつく。

『お父さんか兄さんかど、何とか云つて怒つてやしなかつたかい、きんちゃん。俺は黙つてうちを出て來たんだから』

『いゝね怒つても何してもゐやしないわな。それに嫂さんが御飯の時何とか云つて繕つてゐなさつたんだし。』

『何でもいゝが、俺のことに就いて、何か話してやしなかつたかい。』

『そんな事はあ、たし知らんわな。そやけん、もう大方雨も上らうから、今日明日には兄さんも歸んなさいと、父さんが言傳をしてゐあつたけに、それで今日は鳥渡寄つたのわす。その外になんにも話してやなかつたわな。』

『うまいこと嘘を云つてゐな。』

嘘でないといふ恐れに斯う云つた。

『兄さん眞箇にひどいことを言ふわなあ。穢いところをわざ／＼廻つて寄つてゐに。』

怨めしさに絹子の云ふところへ、軽い衣摺れの音が梯子段にして、さ、ち、さんは二階に上り／＼

『今日はようた寄つたに、きんちゃん、合羽は脱いで話しもたやりや。』

『そやけん、姉さん。あ、たしこれから直ぐに歸るのわすに。兄さんに言傳があつたけに鳥渡寄つたばかりねすもの。』

『けねといつ時は遊んでもた行きよ。あなたは滅多に寄つてやつては下さらんのだし。兄さんも此頃はものやうには來られないんだけねに、今度は長くどめこ、う位思つてゐるんですもの。』

『處が姉さん、わたし困つてゐるんだよ。今日にもうちから歸つて來いなど言つて來てゐるんだもん。』

『こんな雨にまあ米さん歸れるもんかな。』

『そやけんぞあたしでさい歸れるに。』

忍ぶやうにして、さちさんが微笑む。わたしは又いらくする所へ歸らねばならない。父や兄の顔などが浮んでく。——わたし、のするのと同じやうな苦悶をしてゐる人が、矢張あるのではなからうか。殊に女の人に多いやうである。自己の意志に反して嫁かされる。それは舊日本の女性には多くありがちのことであつた。無抵抗なる弱き人々に。わたしは男らしくないのではなからうか。其麼ことを鳥渡考へてゐる間に、さちさんと絹子とは少し距つた處に坐り込んで、何かひそ／＼話してゐる。學校の先生の噂らしい。わたしは又眼を町の臺に投げて、何時になつたら斯麼不安から逃れ得るかど、獨りで果しなく考へ續ける。

雨の日の一日は事も無く明ける。

わたしはどうしても歸らなければならなくなる迄は歸るまい。さう思つて成る可く氣を紛らしてみる。

髪でも摘んでみたら少しは清々するだらうと思つて、わたしは乳母の家を出るのである。汚い番傘は差したくないの、自分で三疊の物置に入つて、さちさんの雨傘を下ろし、綿輪は抜いて、棚へ上げて置いて表へ出る。

柄の長い蛇の目の傘である。丸に酢漿の紋所は「近江屋」代々の定紋である。「江上幸子」と朱で入れたのは、あの番頭の手跡らしい。憊うした長柄の雨傘を差して、紙を打つ細雨の音楽を聞き乍ら、透き通る程綺麗な薄紺色の下に歩くと、むさくるしい自分も何だか美しく見ね、婀娜な歌舞伎の若衆になるやうである。不圖、ごうかした機勢で、「虞美人草」の「春はものゝ句になり易き京の町を七條より一條」といふ文句が浮

- 81 -

『ほにまあ若旦那さん、大抵ハイカラになりましたなあ。けんご嬢さん、あんたも人のこつちあございませんぞ。』

『それや矢つ張年頃だもんなあ。ホ、。』

甘へたやうにさちさんが言ふと、陽氣な三つの笑聲は、ぴか／＼光る板戸の前で、大きな一つの力になつて、古い構の家屋を振動させた。

秋雨は七八日にもなるのだけれど、未だ霽れ難てに降つてゐる。自分の身内まで、／＼するやうな物懨さ佗しさに飽々した。

兎に角うち、に居りさへせねば、多少はあの事からも遠ざかつたやうな氣になれはしまいかと思つてうちを出たのに、話があるから歸れ／＼と、三度までも言傳を寄越したり、最後に嫂が手短かな手紙で、今度は形がつくかも知れないから、父母や兄の氣を悪くさせない内に歸つてね出で、は如何でせうと、誘ひ出すやうな事を言つて遣つたので、それでは歸つてみやうかといふ氣になり、不安の思ひを抱いて歸つてみると、父母も兄も別に什麼したといふこともなく、矢張何時ものやうに影暗い滅入つた様な生活を、それでも平氣で續けてゐるのを眺めては、それだけで何だか淋しく頼りないやうな心持になつてしまふ。只金といふものばかりに執着して、儲口のことばかりを胸に描き、いつも顰めた顔ばかりして、高尚な人生の享樂といふやうな所に目の届かぬ父や兄は、たゞ溜りさへすればそれでよいと、誰のために何のために財貨を積むのか、わたしには疑はずには居られないのである。頭には恐ろしい程頑迷な型が出来てしまつて、新しい方面の美

「いい光明を認得る官能を持つて居ない。只舊家であり金のある家であるならば、養子に遣るといふことは本人に取つて無上の幸福としか思つて居ないのだから、わたしは甚だ困つてしまふのである。兄はまたわたしに長いこと勉強させてやつた上に、父から受け継いだ財産の幾分を分けるといふことが、餘程氣が、うりて居るらしい。それに父の壯年時代、成算のない事業氣のために、遺産の大半を失つたのだから、それを兄と一緒になづて、何麼かして元に返したいと急つてゐることが、矢張わたしを悩まして居る原因らしく思はる。十四も年違ひの兄との間に横へらるゝ思想上の距離の大きいのを、泌々呪はすには居られない。わたしの蔭目になつては世話して呉れる嫂なども、追々そんな暗い色に變化してゆくのではないかしらと思ふと、微のついで朽ちる姿が可憎く哀れである。頑是もなく惡戯ばかりして遊んでゐる三人の甥なども、蟻仕第では全く古き人となつてしまひはせぬかと、つい入らぬ處まで考へてみる。古き人、呪はれたる人、その人の生には何の意義があり色彩があらう。母はそれでも、あの家が縁家でもあり、わたしでないと血統が繋がらぬといふ事情もあり、又多少はわたしに對する慈愛の感情から、體質の弱いのに苦勞して勉強させようよりも、安らかに暮らさるゝ道の立つことがあればそれがましだと思つて、わたしを通して見たわたしの幸福といふものを、自分勝手に定めてしまつてゐる。併し、わたしの幸福といふものは、わたし自身が幸福と思ふより外に何があらう。わたしは男らしく、驕然に勇猛精進しなくてはならぬ。

さうは云ふものゝわたしは心配である。わたしは實際わたしの腕でさうした豫想通りの幸福に到達することが出来るであらうか。わたしは今あの壓迫の前に屈従するよりも、もつと高價な充實した生を果して贏ち得べく資格づけられて居るであらうか。……併しわたし。汝は努力奮勵の後に非ずんば、問題を解決する



ことは能はざるべし。汝は汝の最高に進め。

それにしても話はどう成りゆくであらう。ひよつとしたら案外都合のいゝ結果になるかも知れないが、其時はわたしのこれまでの心配や悲歎や激昂は全くの杞憂に終つてしまふのだけれど、それでも仕うかさう成なつて欲しいのである。併し什麼しても納得させねば止まぬといふ頑固な決心がうちの者にあるらしい、さうだとすれば矢張駄目である。勢い最後の手段まで出なくてはなるまい。さう思つていらしく落着かなくて居る。

歸つて来い／＼と切りに呼び寄せたのだから、もうあの話を持出さるゝに違ひないと思つて、もどかしくもありそれでもたゞ／＼してゐる。食事の時などは、皆同じく臺所で顔を見合せてゐるのに、父も兄等もあの事に對しては全く黙り込んでゐて、其の外のことだつて碌に言葉も交へずに二日は過ぎた。今日はやつと晝頃から、蕭やかな雨も降り止んで、誇張されたやうな簷滴りの冷たい響を聞くことも出来る。窓の前の川には、少しは水嵩も殖れたやうであるが、水は著しく汚れに濁つて流れてゐる。對岸の家や樹なども、常時に比ぶればはつきりしてゐる。家や樹々の後方には、山の腹だけが斑々に見えてゐる。霧のやうな白いものが、ちぎれ／＼にふわ／＼と山の前を逍遙ふからである。

わたしは戶外に飽きた眼を室内へ運んで鴨居に懸つた「臨水堂」の額を見るときもなく見てゐると、何だか倦うむかし、男が丁髷でゐた時分に、茶でも煎じて靜かに飲んでゐた人の居間には相應しい名であるな／＼自分からはすつとかけ離れた事を考へて、茶人の姿を胸に描く。不圖した聯想からそれが近江屋の小父の顔に

變つてしまつて、その横にばかりと乳母の顔が又浮いて来る。それがぐるつと變ると松やである。松やは面白さうに笑つて「猫でやんす／＼」と獨り喜んでゐる。可笑な奴だと思つて見てゐると、

『兄さん、兄さんてや、あなた何しと御出でなさるの。母さんが先刻から呼んでゐるに。』

絹子が廊下に立つて此方を見てゐる。わたしは呼ばれると云へば屹度あの事であらうと思つて、顔が赫として、きめく胸が抑へ難い。――八疊の納戸には父と母とが端然と並んでゐるので、何だか氣味の悪いやうな氣がして、距つて坐る。

『どうかい米二、あの事はようく考へ直して見たかい。』

父は非常に溫和である。やがて六十に手の届く父は、うるさい程白髪が生へた髪を二つに分けてゐる。わたしは答へられぬから、黙つて不足な顔をして居る。

『やつぱりた前さんいかんかない。斯麼ことは念の上にも念を入れて考へて見るもんだね。喰はず嫌ひといふこともあるのぢやけねに、それから又こりや悪い一圖に思ひ込んだら、何時までも矢張悪いやうな氣がするもんや。今迄、た前さんが憐れ再々同じこと言はれるのを、辛いく思つてゐたらうけど、それやれ前さんの間違といふもので、な、斯麼に口の酸うなるまで云うてきかす云うのは、矢つ張た前さんの事のよかれがし思つてゐるからぢやわな。親兄弟より外に、恁麼こと言うて聞かすもな眞箇にありやせんものぢやけにな。』

『ほんだからぢやな米二、むかうからも今日明日というて來たあるのぢや無やし、どうせ行くに定つても來春のこと位の事ぢやけねに、それまでに一つ什麼かして行くといふことにきめて貰ふ譯には行くまやかない。

眞箇に兩方とも都合のね、事ぢやけになあ、この事は。』

『兄さんにしても、お前さん、學問銀だけは出してやつてもね、云うてぢやけねど、家を分れるゆて、別に一文もやる譯にや行かん、と恚う云ふのぢやけねにな。』

は、あゝと頷かすには居られない。兄が今日席を外したのも、此の事でもう一度考へ直させうと企てたのである。けれどもわたしには其麼ものは入らない。あの家へ行きさへせねばそれでいゝのだ。どこへまでも主張を變へない、野獸の牙のやうな頑な影を、嫌惡と危懼との念に驅られつゝ、わたしは睨と凝視していると、又顯れるのはあの力なき者の姿である。餘儀なく爲せられるといふことに對し、それは絶對のものであると斷念して、絶望と忍従との悲境に沈淪しつゝ、何等の反抗をも敢て得爲ない、纖弱い、蒼白な、而して空虚の如きあの“powerless power”である。ね、わたしよ。汝は飽くまで抵抗せねばならぬ！

實際心からは好かないことであるけれど、わたしは恚うしなくてはもう道がなくなつた。どう思ひ返しても、矢張恚うするより外に仕方はないらしい。——此のことは前に屢々考へなかつたでもないけれど、若しさうした餘儀ない結果に逢着せねばならない時には、恚うしてみたら仕うだらうと、只空想してゐたのであつたのに、わたしに遂にさうしなくてはならなく迫られてゐる。先刻父があれ程までに怒り、母があれ程までに泣いたのを見ると、行く行かぬの問題はもう自ら定められてゐるのも同じである。頭の無い人を最早相手にしては居られない。後の結果までさう細々と考ふる餘裕は見出せない。只さうするより外の道は塞つてゐるんだ。運命がわたしを仕う導くか、それはもうわたしの知つたことではない。恚う思つてわたしは

わたし、の心を決める。

今夕方嫂の入れて呉れた洋燈の石油がもう大分減つてゐる。わたしはその石油の燃えてなくなつた時間だけ、此の机に凭うして凭れて考へ返したわけである。色んな事を思つてはみたれど、矢張これより外に仕方がないんだから。——洋燈は、いゝと絶えず鳴る。黄色い灯影は譯もなく揺いでゐる。室一杯に溢れた光は、四周からわたしをつゝくやうである、窓の下の方音も可なり高く聞えて来る。洋燈を鳥渡細くしてみると、外は朧な月夜であることがわかる。

わたしは財布の金を音たてぬやうに覗いて検べ、鍵で机の抽斗を開けて、郵便貯金の通帳を取出して、これも抽斗の中にあつた、新しい手巾に包み込む。慇懃時には亡母の寫眞も、淋しい身に取つては相應しい道伴ともなるだらうと思つて、序に包みの中に入れて置く。

けれども、慇懃した折に亡き母は何といふであらう、も一度自分の反省を促すためにもと思つて、寫眞を取出して紙袋から抜いて見る。日頃見慣れた姿ではあるけれど、何だか知らぬ人のやうな氣がせずには居られない。黒い襟のかゝつた此の縞の着物だけでも、其頃流行つてゐたものであるとは云へ、素人ではないらしく見せてゐる。母は慇懃に細面な、やゝ眼尻の上つた女であるのに、些とも母には似てゐないわたしは、果してこの人の子ではあるだらうか。……けれどもそれは仕うでもよい。わたしはこの女の遺兒であるぞと思うてゐさへすればよいのだから。さう思ふ。それに又この人の知つたことではないかも知れぬけれど、慇懃なつて行く自分の運命を、この人に歸してしまへば幾らか慰めにもなるのである。寫眞は笑を含んでゐるが矢張わたし、の淋しい訴も、微笑み乍ら聞いて呉れるのだからわたしは嬉しい。けれども、何だか今更乍ら悲

しいやうな氣がして、心を集めてくわつと泣いてみる。しかしそれは心から泣けないのである。顔を歪めたばかりの藝當に過ぎない。わたしはもう涙を通過してしまつてゐる。

紬の袷に着更へて、マントルを小脇に搔込む。どうして出やうかと鳥渡憤然となる。洋燈は變らずじい／＼鳴つてゐる。母屋の方では微かに二時を打つ。——わたしはそつと障子を開けて置いて、洋燈を眞上からふつと吹く。灯は幽靈のやうに搖めいて消える。朧な月光が直ぐに四邊を占領してしまふ。下駄を片手に持つて跣足のまゝで、靜かに更くる夜の庭を脱け出でる。

慌だしく水棹を取り、取る手も早く舟を押し出す。焼け着く火焰を避くるやうに氣を急がせて、川を渡つてしまへばもう隣國である。四邊には一つの人影もない。草木も家も死んだやうにしてゐる。月は物足らぬ程朧である。息苦しさまでうつ胸の動悸の、體軀をゆさぶるやうに甚しく響くのを、息を殺して無理に抑壓しやうとすれば、却て動悸は高うなつてくる。わたしには、途方も無いことをしてしまつたといふ思ひと今すぐ歸りさへすれば何でもない事だといふ思ひとが、恐怖に攪亂した胸の中で混戦して、戦果を見收める餘裕も無いのである。それでも「之前は塞しいことをしてゐる」と答める聲が、去らうとするわたしを心の奥で呼び留めてゐるのに、わたし自身心の矢は、もう一本もその聲に應ずることが出来なくなつてゐる。わたしは只譯もなくづ／＼と怨靈の手に引摺られて行く。——何處か遠方から手紙でも出したら、後の始末はつくであらう。さうしてゐる間に直きうちから歸つて來いと云つて寄越す。それで事件は落着してしまふ。さうしたことが豫想される。

酷しく冷わるのに氣がついて、わたしはマントルを頭から被る。秋の夜の川風は、さうと寒く吹いて來て、鬢の後れ毛のやうな草葉をゆるがせる。ひそより返つた川邊の靜寂を排して、力無きさうに蜚がすだいてゐる。淋しく靜かに更けて行く秋の夜の月は朧ろにかすんで、川端に立つてゐるわたしの前には、自分の村、自分の里、自分の家は何も知らぬやうにして幽かに對岸に眠つてゐる。

父、母、兄、嫂、妹、乳母、乳兄弟、及び堪へ難い程頑強な壓迫の觀念——さうしたものを包容した對岸の天地から脱け出たのである。

(篇中の米二なる Mr. S. Haradani に此の拙作を呈す)

——大正二年九月作——

## 桑野先生を想ふ

二、三、乙

蘇

陽

立つ秋の、日は暮れつ、  
草も木も人も……、  
肌寒き、潮にさふれて、  
朝顔や、その果つる姿もあはれ。

風ひとり歔歔りつつ、  
濱づたひ、渚をゆくなる、

忠海、細霧の幕に纏はれて、  
あゝ翼をさめし親鳥は……、

痛ましき過古の流れを、  
さすらひの翼に染めて  
今、白みゆく黎明の、  
明くるをまたぬ鹿島立ち、

血に叫ぶ籬等を殘して  
蒼海の野邊のかなた、